

科学社会学会第 10 回年次大会
プログラム

2021 年 9 月 20 日 (月・休)

Zoom によるオンライン開催

第 10 回年次大会実行委員会

寿楽浩太（東京電機大学・委員長）・定松淳（東京大学）・標葉隆馬（大阪大学）・河村賢
（大阪大学）・開田奈穂美（福岡大学）

【オンライン開催について】

新型コロナウイルス感染症に係る現状に鑑み、感染拡大防止をはかり、皆さまのご健康と社会活動の継続を第一としつつ、本会の本旨である闊達な学術活動を最大限に維持する観点から、本大会はテレビ会議システムを用いたオンライン開催とします。

発表者は、同システムを用いたリアルタイム発表、もしくは事前収録動画による口頭発表を行うことができます。大会参加者は同システムを介して発表を聴講し、あるいは発表者に質問を行うことが可能となります。

また、当学会の今年度の総会につきましても、テレビ会議システムを用いてオンライン開催いたします。

学術分野における普及状況に鑑み、「Zoom」を本大会のテレビ会議システムとして使用します。

【参加登録ならびに参加費について】

- 本会会員（正会員・購読会員）は特段の手続きなく本大会に聴講者として参加いただけます。今回はオンライン開催に伴い、開催に係る費用も節減できておりますので、皆さまから頂戴している会費から所用の費用を支出します。つきましては、会員（発表者の正会員を含む）の参加費は無料といたします。聴講希望の会員の方は、事前の参加申し込みは不要です。
- 本会会員ではない方で、本大会への参加を希望される方は、恐れ入りますが郵便振替による参加費の事前納入をお願いいたします。参加費 2,000 円を 9 月 13 日（月）までに下記の本会口座にお振り込みください。また事務局（sssj.office@gmail.com）までお名前とメールアドレスをお知らせください。

郵便振替番号 00200-6-5694（加入者名：科学社会学会 SSSJ）

※他の銀行からの振り込みの際は、以下の口座をお願いします。

ゆうちょ銀行 ○二九店（ゼロニキユウ店 店番 029） 当座預金 0005694

加入者名：科学社会学会 SSSJ

- なお、本会は正会員年会費 6,000 円、正会員（大学院生等）年会費 3,000 円にてご入会いただけます。正会員は年次大会での研究発表を行えるほか、本会学術機関誌『年報 科学・技術・社会』（頒布価格 2,950 円）1 冊を年 1 回受け取ることができます。本会 Web サイト（<http://www.sssjp.org/>）にて手続きをご確認の上、ぜひこの機会に入会をご検討ください。9 月 13 日（月）までに入会手続きを完了された方も本大会に会員として参加いただけます。

【大会の進行に関する一般的なお願い】

- 発表時間は最大 20 分間です。その後、質疑応答の時間を最大 10 分間とします。つまり、各発表には合計して 30 分間の時間が割り当てられます。遵守をお願いします。
- また、発表 1 件に対して 10 分間を座長持ち時間として割り当てます。この時間を各発表に関する議論の時間とするか、全体討論の時間とするかは座長の判断に委ねます。
- なお、第 3 セッションについては、大会実行委員会の判断により、ミニシンポジウム形式にて実施することを各発表者に依頼しておりますので、異なる進行で行います。具体的には、2 名の発表者から 10～20 分程度の話題提供を受けた後、ディスカッションからの問題提起、パネリスト間のパネル討論、そして聴講者も交えた全体討論の順でセッションを進行する予定です。当日の座長の進行にご協力ください。

【Zoom によるオンライン開催に関するご案内と注意事項】

- 接続先 URL（あるいはミーティング ID、パスワード）は会員ならびに事前登録済みの非会員参加者へのメール回覧にて別途、大会の数日前に通知いたします。
- Zoom のアカウント作成や各 OS 向けアプリケーションの導入等の事前準備は、恐れ入りますが皆さま各自にてご対応くださいますよう、お願いいたします（インターネット上では関連する平易な解説情報が容易に見つかりますので、ご参考にされるのも一案かと存じます）。
- 各セッションや総会の Zoom ミーティングは、事務局が「ホスト」となって開催します。
- 皆さまが Zoom ミーティングに接続されましたら、いったん、「待機室」にお入りいただき、会員名簿あるいは非会員事前登録参加者名簿と照合の上で会場にお通しいたします。
- ついては、接続の際の皆さまの Zoom 表示名について、できるだけ本会が把握しているお名前と一致したもの（あるいは容易に推測できるもの。例：ローマ字表記）に設定くださるよう、ご協力をお願いいたします。ニックネーム等で判別が難しい場合は、個別チャット機能にてお名前の確認をする場合もありますので、その際はチャット機能にてご回答をお願いいたします。
- この手順が必要となりますので、会場となるミーティングルームへの入室はお早めにお済ませくださいますよう、ご協力をお願いいたします。
- 座長ならびに発表者の方々には「共同ホスト」権限を付与します。画面共有が許可されますので、発表者には各自のご発表資料を共有した上でのご発表、もしくは事前収録動画の再生をお願いいたします。
- 聴講者各位におかれては、マイクは常に「ミュート」するようお願いいたします。なお、発表中の静謐を保つ、あるいは討議の円滑な進行を図るべく、複数の方のマイクが同時にオンになっているとしばしば発生する場合がある「ハウリング」や「雑音」

を防止するために、座長もしくは事務局が必要に応じて皆さまのマイクを「ミュート」させていただく場合もありますので、ご了承ください。

- ご質問・ご意見等発言をご希望の際は、「ミュート」を解除して発言がある旨を発話いただいてもかまいませんが、その後、必ず座長（ないし発表者）の了承を得てからご発言ください。
- プライバシー保護や著作権保護の観点から、参加者の皆さまによる Zoom の機能を用いたセッションのレコーディング（録画）は許可しない設定といたします。また、その他の手段による動画の録画・音声の録音・静止画の撮影（「スクリーンショット」含む）も固くお断りいたします。もちろん、何らかの手段で取得した大会開催中の動画・録音・画像を SNS 上その他の公開・公共の場において第三者に閲覧可能にすることも厳禁といたします。発表者からも、この点を徹底するよう要望が出ております。ご参加の皆さまにおかれては、何卒ご協力をお願いいたします。
- なお、大会の学術的な記録としては、事務局にてレコーディング（録画）を行い、情報管理に十分留意した上で保管する予定です。録画には発表者以外の参加者の画像やお名前も映り込む場合があります。これらについてご懸念がある方は、ビデオやプロフィール画像などのご本人の映像はオフのまま参加される、Zoom での表示名を個人が特定されにくいものに変更する（上記の通り、入室時には学会にご登録の氏名への設定をお願いいたしますが、入室後の再変更は可能です）等の工夫をお願いします。
- 今後、何らかの正当な目的で会員各位や外部から閲覧の希望があった場合には、何よりもまず発表者の意向を確認の上で、事案の性質に応じて学会事務局、大会実行委員会、理事会において慎重に検討の上で対応いたします。
- 発表資料については、各発表者の意向を尊重しつつ、配布を希望する方の資料を電子的な方法で閲覧あるいは取得していただけるよう、クラウドストレージサービス「Box」を用いた電子ファイルの共有を行います。当該サービスは、ファイル閲覧のみの指定にする（ダウンロード不可）とすることも可能であるなど、各発表者の意向に応じた資料の共有に好適と判断しております。発表者各位には、ファイルアップロード方法等の案内を大会実行委と事務局が行います。会員並びに登録参加者の閲覧方法の案内は、電子メールにて大会当日以降にお知らせする予定です。
- その他、大会・総会オンライン開催は本学会としても初めてのことであることから、至らぬ点多々生じ得ますし、不測の事態も大いに予測されますが、事務局・大会実行委員会・理事会としても最善を尽くしますので、何卒、臨機応変にご協力のほど、よろしく願い申し上げます。

【プログラム】

9:30～11:30 セッション1 (個人研究報告 I)

座長：福留恵子 (東海大学)

1-①

葛藤する専門家と社会的文脈の中の素人の選択：コロナ禍における第1回緊急事態宣言直後の調査データをもとに

藤本昌代 (同志社大学)

1-②

Twitterでは誰がどのように「コロナ脳」という言葉を使っていたのか

標葉靖子 (実践女子大学)

1-③

情報倫理学の文脈及びその変化を社会学の研究を通じて検討する可能性

萩原優騎 (東京海洋大学)

11:45～12:30 総会

13:20～15:20 セッション2 (個人研究報告 II)

座長：立石裕二 (関西学院大学)

2-①

人文・社会科学系研究者の研究者アイデンティティ—自らが準拠するジャーナル共同体と学術共同体における正統性

中川瑛 (The University of Edinburgh)

2-②

萌芽的科学技術をめぐる RRI アセスメントアプローチの構築

標葉隆馬 (大阪大学)

2-③

「リスク受容」と知識への着目

菅原慎悦 (関西大学)

15:50～17:50 企画セッション (大会実行委員会企画)

日本学術会議：アカデミアの側を問う

15:50～16:00 趣旨説明 定松淳 (東京大学)

16:00～16:20 話題提供① 阿曾沼明裕 (東京大学)

16:20～16:40 話題提供② 伊藤憲二 (総合研究大学院大学)

16:40～16:50 コメント 高橋桂子 (早稲田大学)

16:50～17:50 ディスカッション

葛藤する専門家と社会的文脈の中の素人の選択

: コロナ禍における第1回緊急事態宣言直後の調査データをもとに

藤本昌代 (同志社大学)

新型コロナウイルス感染症の拡大が長引く中、政府と疫学の専門家が発するメッセージは、人々に科学的根拠に基づいた行動を促す効果があるのだろうか。第1回緊急事態宣言の際、日本では社会的封鎖に近い状況が起こった。しかし、2020年春の調査では、テレワーク、自宅待機、休業などをしていただいた企業だけでなく、就業継続していた所が少ない。同年7月に行ったインタビューでも顧客への納期厳守のため、休業している場合ではないと回答する企業があった。政府が7割を目指すテレワークも実態調査では他地域より高い実施率である首都圏でも到底届くものではなかった。

疫学の専門家は飲酒者、若年層の遊戯者の抑制で感染症拡大を防止できると伝えるが、感染者数が多い地域は、いずれも都道府県別総生産の上位地域ばかりである。特にテレワークへの移行が難しく、対面で就業せざるを得ない人々とその家族の感染による拡大への懸念は捨てられない。若年層の遊戯者が重要な要因であるというマスメディアの決めつけは、人々の自粛行動への効果が疑わしい。また日本の企業の99%を占める中小企業はテレワーク率が低い上に、彼らが操業を止めてしまうと発注側である大企業の事業への影響も大きい。また、政府や疫学の専門家たちも上位経済圏での感染者数と就業者数の関係は語らない。

葛藤する専門家と素人である私たちの選択との関係は、S.ホールが「折衝的な位置」と呼ぶ、オーディエンスがメディアからの支配的な読みの優越を大枠では認めながらもテキストの個々の部分については、固有の読みを促すという状況に当てはまる。確定的な科学知識として権威が確立していない専門家の知識は、社会に対する知見を踏まえ、より説得力をもって発信しなければ、私たちがメッセージをデコーディングする際、容易に個別の要素の中に埋もれてしまうだろう。

1-②

Twitter では誰がどのように「コロナ脳」という言葉を使っていたのか

標葉靖子（実践女子大学）

2020 年に入って世界的な感染拡大を引き起こした新型コロナウイルス感染症（COVID-19）をめぐり、日本の Twitter 等のソーシャルメディア上で「コロナ脳」という言葉が登場した。これは、3.11 以降、Twitter 等によく使われるようになった「放射脳」というネットスラングをもじったものであると考えられる。「放射脳」という言葉は、（ある立場に立つ人にとっては）「過剰」とみなされる反原発やリスク回避行動・発言を行う人々を「科学的に冷静な判断ができない非科学的な人々」とレッテル貼りし、揶揄するために用いられることが多い言葉である。

「コロナ脳」もまた、Twitter 登場当初は「いたずらに不安がり科学的に冷静な判断ができない人々」を揶揄する意味で用いられる傾向があった。しかしながら、やがて「コロナ脳」という言葉は、自分とは異なる意見・行動をとる人々（あるいはそうした仮想敵）への攻撃の言葉として広く用いられるようになっていった。その背景には、COVID-19 による災禍が長引くにつれ、何が「科学的に正しい」のか、どのような行動が「正しい」のかをめぐるメディアの言説が混乱を極めるとともに、終わりの見えない「自粛」に対する人々の不満が幅広い層で高まっていったことがあるように思われる。

そこで本研究では、収集した「コロナ脳」を含む Twitter のツイートおよそ 23 万件（2020 年 1 月 1 日から 7 月 31 日まで、RT は除く）を対象に、Twitter において「コロナ脳」という言葉がどのようなアカウントによってどのように使われているのかについての分析を試みる。それにより、COVID-19 による災禍のなかで人々が何を恐れ、何を「非科学的」「非合理的」だと攻撃していたのか、またその党派性について考察したい。

1-③

情報倫理学の文脈及びその変化を社会学の研究を通じて検討する可能性

萩原優騎（東京海洋大学）

ここ数年間、勤務先の大学にて初年次教育としての情報倫理関連の授業に携わってきた。その過程で、情報倫理教育の今後の在り方にも関わり得る一つの変化に立ち会うこととなった。それは、昨年度からの COVID-19 の蔓延に伴う、Web 会議ツールの授業への本格的な導入である。時間の制約もあるため、たとえ十分には扱えないとしても、Web 会議ツールの利用に関わる倫理的な問題も、初年次教育の中で扱う必要がある。

初年次教育の対象となる若者たちを取り巻く情報通信技術の変化や、その発達及び普及に伴う社会状況の変化は、情報倫理に関わる教育や実践が位置づけられる文脈の変化として、視野に入れられるべきであると考えられる。しかし、従来の情報倫理学の議論では、こうした点が十分に考察されてきたとは言いがたい。さらには、教育の現場への Web 会議ツールの本格的な導入は、文脈に新たな変化をもたらしているかもしれない。一方、社会学においては、若者たちの情報通信技術との関わり方、プライバシーに対する認識、そしてそれらの変化について、研究の蓄積がある。それらを参照することで、より実態に即した情報倫理教育を構想することができるのではないだろうか。

以上のような認識に基づいて、本発表では社会学の領域におけるいくつかの研究を取り上げ、その主要な論点を確認し考察する。そのようにして、初年次教育としての情報倫理教育に携わる教員が認識しておくべきと思われる事柄を明らかにする。

2-①

人文・社会科学系研究者の研究者アイデンティティ
—自らが準拠するジャーナル共同体と学術共同体における正統性

中川瑛 (The University of Edinburgh)

2020年に科学技術・イノベーション基本法が改正され、人文・社会科学系研究者の外部連携への期待が強まっている。しかし、研究者は準拠するジャーナル共同体における成員としての正統性を研究者アイデンティティとしているため、越境への心理的な抵抗が想定される。

本研究の目的は、人文・社会科学系研究者が、実践共同体における成員としての正統性と越境をどのように関連づけているかを明らかにすることである。

本研究のリサーチクエスチョンは、1.人文・社会科学系研究者はそもそもどのような境界を認識しているのか。2.人文・社会科学系研究者は、実践共同体における成員としての正統性に関連して越境をどのように位置付けているのかの2点である。

本研究の研究参加者は、異分野の研究者ないし非学術研究者との越境経験を持つ哲学・経営学・心理学・教育学の研究者9名である。半構造化インタビューを行い逐語録を作成し、質的記述的研究法を用いて分析した。

本研究の発見的事実、人文・社会科学系研究者が、ジャーナル共同体だけではなく、ジャーナル共同体の正統性を比較可能にする学術共同体にも参加していることである。研究者の異分野摩擦を説明するジャーナル共同体論と、知識生産を理論貢献志向と問題解決志向とに分類するモード論を組み合わせた学術共同体概念によって、一方だけでは説明できない研究者アイデンティティの正統性を理論的に説明することが可能になった。

本研究の理論的貢献は、学術研究者としての正統性の観点から越境の位置付けを3つに分類し、それぞれ研究者アイデンティティへの影響が異なることを明らかにした点である。さらに、学術共同体における成員としての正統性が生み出されるシステムにも着目し、その正統性が静的なものではなく、動的に構築され、変化するものであるとするジャーナル共同体のモード移行モデルを提案することができた。

科学技術の急速な発展は、「倫理的・法的・社会的課題 (Ethical, Legal, and Social Issues: ELSI)」の把握と対応、幅広いアクターの問題意識や価値観の包摂、潜在的危機に対する早期からの洞察の必要性をもたらした (小林 2007; 吉澤 2013; Bauer 2015; 城山 2018)。このような課題に対して、近年、「責任ある研究・イノベーション (Responsible Research & Innovation: RRI)」の枠組みに注目した議論が進みつつある (Owen 2012; Stilgoe et al. 2013; Stilgoe & Guston 2017; 標葉 2020)。

RRI は、「現在における科学とイノベーションの集合的な管理を通じた未来に対するケアを意味する」(Stilgoe et al. 2013: 1570) と表現され、ELSI を含む科学技術の幅広い社会的インパクトに対する「先見性」、幅広いアクターとフレーミングの「包摂」、より相互の「応答」と、「省察」を踏まえたイノベーション・ガバナンスの実現を目指すものである (標葉 2020)。

このような ELSI/RRI の課題に対して、発表者らは、JST-RISTEX の委託研究などを通じて、萌芽的科学技术を対象とした ELSI/RRI 議題の分析、過去の事例・教訓の共有、倫理綱領の共創、RRI 議論ツールの作成と対話実践などを現場の研究開発者との協働の下で実施してきた (Yoshizawa et al. 2018; 標葉 2019)。これらの研究を通じて、ELSI/RRI 議題の分析と熟議を行う RRI アセスメントの構築が進んでいる。

本発表では現在進行中のプロジェクトの概況を発表すると共に、今後の課題を整理することで、RRI アセスメントの洗練のための議論を展開する。

「どれくらい安全であれば十分に安全と言えるか？」（“How safe is safe enough?”）は、原子力をはじめとする科学技術の「リスク受容」をめぐる根源的な問いとして、常に論争の的となってきた。原子力の安全目標をめぐる社会的議論を分析した発表者の近著では、日本における原子力の「リスク受容」がリスクの「程度問題」に局限化され、「どれくらいのリスクの小ささならば社会が受容してくれるか」という問題設定の下に議論が進められる一方、技術専門家によるリスク評価の内実を社会に「開く」ような営みがほとんど見られなかった点を指摘した（菅原 2021）。福島第一原子力発電所事故が、専門知の持つ不確かさ・曖昧さや価値負荷性を鋭く問うていることに鑑みれば、リスク計算結果の大小にのみ着目して「リスク受容」を論じることは、強い批判の対象とならざるを得ない。

国際リスク分析学会（SRA: Society for Risk Analysis）による「リスク」の定義に知識の側面が明示されるなど（SRA 2018）、近年のリスク学分野ではリスクに係る専門知への注目が高まりつつある。van Asselt and Renn (2011) は、リスク・ガバナンス論の立場から、「安全」よりも「不確かさ」の受容に焦点を当てることを提案する。Downer and Ramana (2020) は、無知（非知）の社会学の系譜に連なる「認識的事故」の概念を手掛かりとして、「どれくらい確かであれば十分に確かと言えるか？」（“How certain is certain enough?”）と問う。van de Poel (2011) は、リスクをめぐる倫理的考察を踏まえ、原子力技術利用を不確かな条件下における一種の社会実験と見立て、どのような条件であればその社会実験を受け入れられるか、という形で問いを立てている。これらの論考を踏まえつつ本発表では、科学技術の「リスク受容」をめぐる議論のフレーミングを問い直し、リスク評価・管理を支える「知識の強さ」（strength of knowledge）を明示的に組み入れた議論の重要性を論ずる。

「日本学術会議：アカデミアの側を問う」

企画趣旨

2020年9月、菅内閣による日本学術会議の推薦会員任命拒否が発覚したのち、人文社会科学系のアカデミアを中心にこれを非難する声が広がった。「日本学術会議第25期推薦会員任命拒否に関する人文・社会科学系学協会共同声明」には、2020年12月2日の時点で140の参加学協会・170の賛同学協会が名を連ね、当会もそこに名を連ねている。「任命拒否」そのものについては政権の方に非があることは明らかであろうが、一方でこの問題を共同声明に賛同するのみで良しとするのであれば、そのこと自体がアカデミアの状態として問題視しうるのではないだろうか。例えばかつて廣重徹は学術会議について、「この人々は、政治力をもたなくても、学問の権威によって国の政策に影響を及ぼすことができると主張したのだったが、そのようなことは学術会議四半世紀の歴史を通じてついになかった」、「政治から身をそらせたことは、逆に、学問を裸のまま政治の力にさらすことによって、政治の力をもろに受けさせることになったのである」と述べている。

もちろんささやかな学会である当会にできることは限られている。しかし科学=Wissenschaft=知と社会の関係に関心を寄せてきた学会として、冷静な議論の場を提供し、私たちの思考を前に進める試みがあってもよいだろう。そのような思いから大会実行委員会では2名の会員に話題提供を、また1名の会員にディスカッサントをお願いした。話題提供者の1人は阿曾沼明裕会員である。阿曾沼会員は昨年度発表された論考のなかで、「学問の自由」「大学の自治」「科学者集団の自律性」という3つの概念の区別について考察している。これらの概念は、今般の経過のなかで私たち自身が無自覚に区別して来なかったものであるように思われる。もう1人の話題提供者は伊藤憲二会員である。伊藤会員も今年度発表された論考のなかで、日本学術会議の機能として科学的助言を行う機能と研究者集団の代表としての機能が混在していることを指摘している。本セッションでは日本学術会議成立初期の経過を紹介いただく。そしてディスカッサントをお願いしたのは高橋桂子会員である。高橋会員には自身が日本学術会議会員として活動した経験を紹介いただきながら、コメントをいただく。その後フロアを含めた議論に移りたい。

政治に対する批判はいったん脇におき、私たちアカデミア自身の現在を再考する機会となれば幸いである。

【引用文献】

廣重徹、〔1973〕2003、『科学の社会史（下）：経済成長と科学』岩波書店、p.140.

阿曾沼明裕、2020、「「学問の自由」の相対性：学問の自由・大学の自治・科学者集団の自律性」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』67(2): 11-25.

伊藤憲二、2021、「アカデミーの系譜と日本学術会議の創設」『日本の科学者』56(4): 38-43.

3-①

学問の自由・大学の自治・科学者集団の自律性—「学問の自由」の相対性—

阿曾沼明裕（東京大学）

今般の日本学術会議問題は、学界や識者、マスコミから政府は学問の自由を侵害しているという批判が出たため、しばしば学問の自由の問題として理解されているが、誰の学問の自由が侵されたのか、学問の自由の問題とは別問題だという意見もある。もしこれが学問の自由をめぐる問題だとしても、他方で軍事研究をめぐる、むしろ日本学術会議こそが学問の自由を侵害しているという保守派・右派からの批判があり、問題は錯綜している。こうした組織と「学問の自由」との関係をどのように考えればいいのか、整理してみたい。

しかし「学問の自由」を議論するのは厄介である。かつて「学問の自由」は、「大学の自治」と不可分に法学・行政学や教育学でさんざんに議論されてきた（現在大学論・高等教育論では、大学改革・効率化重視派などからは無視されている）。科学社会学では「科学者集団」は多く議論されてきたが、「学問の自由」は、自由が知識を生むというようなモダンな幻想、ナイーブな考えとして、積極的に議論されてはいないだろうし、広重徹の「科学の体制化」的に言えば、しょせん体制化された傘の下での「学問の自由」に過ぎないとなると、議論する気にもなれないかもしれない。

本報告では、より基本的な視点から、錯綜する概念や議論を整理しなおす。まずは、「学問の自由」「大学の自治」「科学者集団の自律性」を別物と考え、しかし、学者・研究者個人の学問の自由を「狭義の学問の自由」、大学の自治と科学者集団の自律性を、組織レベルの自由として「広義の学問の自由」と捉える。そして、「誰にとっての自由か」「何からの自由か」というシンプルな枠組みで、「学問の自由」「大学の自治」「科学者集団の自律性」の関係を整理する。そのうえで中間組織である大学や科学者集団と学者・研究者個人との間での「学問の自由」の問題に進む。可能であれば学術会議の在り方や科学のガバナンスなどについても議論したい。

予期せざる結果としての初期学術会議

伊藤憲二（総合研究大学院大学）

学術会議会員任命拒否事件に伴い、2020年10月ごろから学術会議に関して様々なことが言われてきた。これらの言説の多くは任命拒否を後付けで正当化するための虚偽情報であるが、それ以前から学術会議というものがそもそも何であるのかについて、十分な研究があるわけではなかった。

任命拒否の是非自体は、学術会議が何であるかとは別の問題と考えるべきであるが、学術会議自体に対する攻撃が任命拒否の後に現れたことは、任命拒否事件も政府と学術会議との関係の一つの帰結であることを示唆している。したがって、この問題をより長期的な文脈において理解するためには、学術会議がどのような組織として誕生し、どのように発展・変化したのかを捉える必要がある。しかし、これに関してまだ学問的に定説を述べられる段階にあるわけではない。日本の科学史のいくつかの局面において学術会議は重要な役割を果たすが、現在の研究状況はその全体像を描くのには程遠い。

その中で、学術会議の成立期は比較的まとまった資料が残っており、なおかつ研究が進んでいる部分である。また、これには現在の私の主要な研究対象である仁科芳雄が関わっており、現在執筆中の仁科芳雄の伝記においても、学術会議に関することに一章を割いている。本発表では、仁科芳雄を中心として、学術会議の創立に関わる歴史的経緯を分析する。

この発表で強調するのは、初期の学術会議の在り方が、ある人物や学界やGHQや左翼団体などの単一のアクターの明確な意図、思想や利害、あるいは政治的な目的のもとに設計されてその通りに成立したのではないということである。それに至るまでの過程は複雑であり、占領期の文脈における国内外の様々なアクターの間交渉等の集合的な意思決定プロセスからなる。それらのアクターは学術会議のような組織を作ることや、その交渉を行うことに関して必ずしも習熟していたわけではなく、それぞれが暗中模索していたのが実態だった。そして全体の意思決定プロセスは、アクターの間の中間的な妥協だけではなく、部分的にはアクターたちが意図・予測しなかった結果をもたらした。本発表ではそのような創発的な（ただし必ずしも望ましいとは限らない）性格に重点をおいて学術会議の創成期の分析を行う。